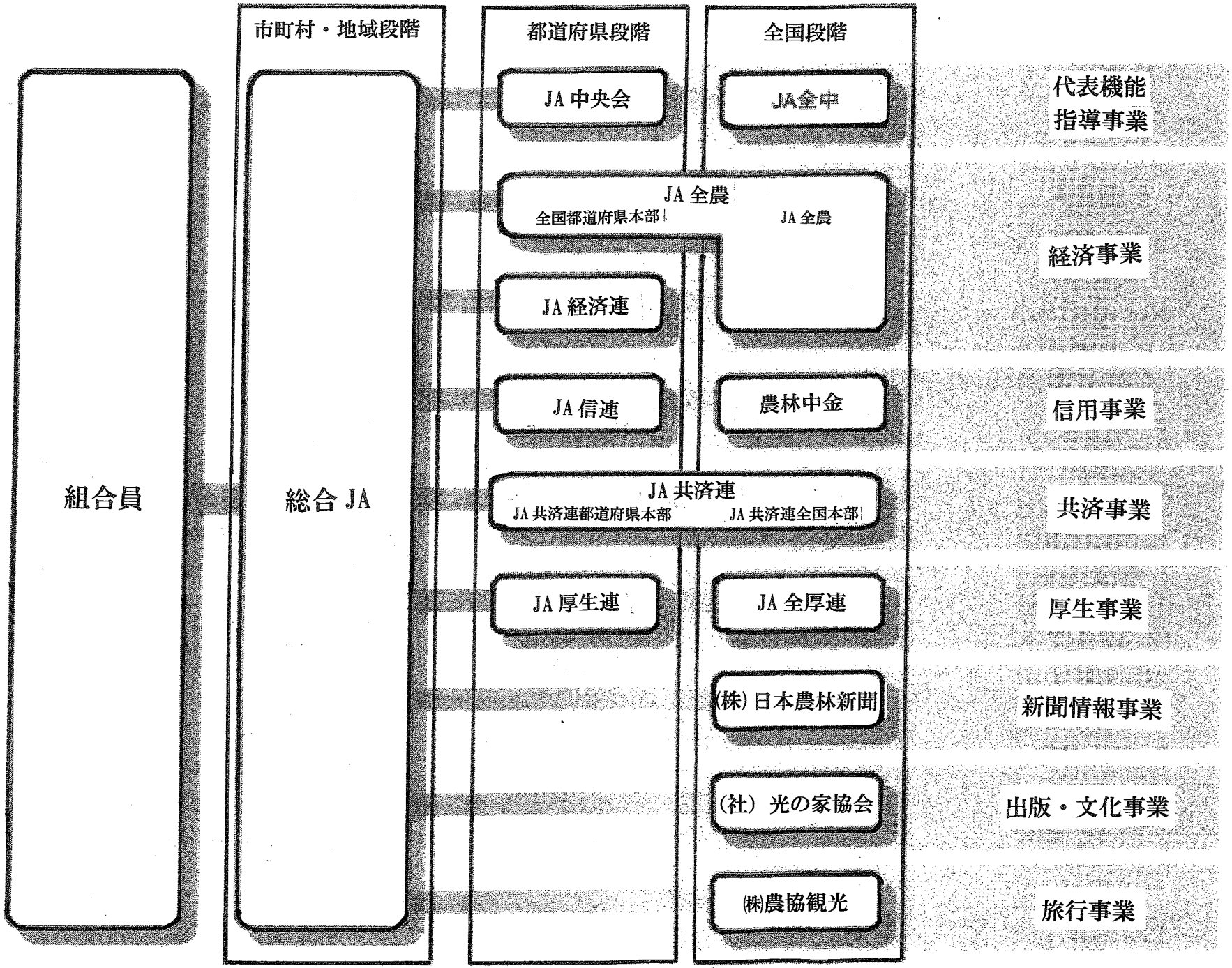
ＪＡ組織図　Japan Agricultural Cooperatives



JAの仕組みについて

作成日：平成27年8月5日
作成者：篠原早苗

JAとは　農業協同組合
　Japan　Agricultural　Cooperatives
ジャパン　アグリカルチュラル　コーポラティブズの略称

農畜産物を輸入に頼っている日本は食料自給率が他の国に比べ低く、1960年代には82%あった自給率が1970年代には60%、1990年には48%と5割を切りました。
また穀物自給率はさらに低く、トウモロコシはほぼ0%、大豆4%、小麦9%であり、近年では輸入自由化に伴い肉類、野菜、果実などの輸入も増加しています。
戦後の農地改革の一環として行政から独立した欧米型の組合を作ろうとしましたが当時の食糧行政は深刻な食糧難の中で統制・管理する必要があったため1948年（昭和23年）に既存の農業界を改組（かいそ）する形で農協が発足されました。
23年前である1992年（平成4年）4月より農協マークに代わりJAの名称を使い始めました。

では組織の名称と役割に入ります。
農家の上に各市町村段階で総合JAがあり、
上から・JA中央会　都道府県農業協同組合中央会、・JA全中　全国農業協同組合中央会があり
対外広報活動や組合員教育、営農指導、国際的協同組合間共同の推進活動をしています。

・JA全農　全国共済農業共同組合連合会　・JA経済連　都道府県経済農業協同組合連合会
農産物の販売や資料、肥料、農薬、農業機械、包装資材、施設資材などの購買
そして日用品、ガソリン、石油、生活物資などの購買活動をしています。

・JA信連　都道府県信用農業協同組合連合会　・農林中金　農林中央金庫
貯蓄、営農資金や住宅、教育ローンの貸付などの信用事業をしています。

・JA共済連　全国共済農業協同組合連合会
万一に備えた共済　主に養老生命共済保険、建物更生共済、火災共済、自動車共済などの保険を扱う共済事業です。
・JA厚生連　都道府県厚生農業協同組合連合会　・JA全厚連　全国厚生農業協同組合連合会
検診、医療、食生活改善、健康管理、病院建設、巡回車設置、高齢者対策などの厚生事業しています。

ほかに㈱日本農業新聞より日本農業新聞の出版や（社）光の家協会から書籍の出版、㈱農協観光から旅行事業など、株式会社や社団法人を設置し幅広い分野での事業を行っています
では、のようにして組合員になれるかというと
組合員には正組合員と准組合員に分かれていて、正組合員は耕作面積や農業に従事する日数などの規定をクリアした農業者が対象です。准組合員はJA独自のもので農業者以外の者でも
1口1000円で一定の出資金を払えば加入できます。

そもそも農協とは農家に技術の提供や、農家に必要な資材を安く提供する、新鮮な農畜産物を販売する場所を提供する、農家の方々の安定した暮らしを支えるための貯蓄や保険事業など、農家のための組織です。
そして組合とは同じ目的を持った人達が集まり助け合う組織です。
協同組合は組合員の生活を守り向上させることが目的で利潤の追求ではないこと、運営方法は株式会社ように一人の人が支配するのではなく、一人に一票とうたっていますが、出版や広報活動では株式会社や社団法人を設けているのも事実です。

現在の農業についてと農協改革について

現在の農業について

勉強会日　平成27年8月8日
記入日　平成27年8月7日
記入者　小出

私たちは毎日食事をしています。 しかし、それをつくりだしている農業については知らないと思います。

その農作物はどこでつくられているのか？　誰が作っているのか？　いくらで買われて農家の生活はどうなっているのか？

日本国内の食糧自給率は40%まで低下60%は海外より輸入しています。

少子高齢化の今、農業従事者の高齢化が6割、担い手が不足になっていま その上、農家の半分は赤字経営で続けています。

今世紀に入ってお米の国際価格は5倍になり、食糧自給率は40%にも関わらず農地は減り続けているのが現実です。

そんな中でも農協は、農業の為の農協で無く、農協の為の農協になっている政府は農協を変えるために農協改革を進めました。

日本農業の可能性を活かし、更なる高みにステップアップさせる為、様々な環境にある農業者が地域の特性や実態に応じて

それぞれ工夫をこらし、経営を自立させていく為の努力が地域農協に求められています。

そうした観点から、今回の決定が地域の各農協が中央組織から自らを解放し、経営の幅を広げるきっかけとなります。

勉強会日　平成27年8月8日
記入日　平成27年8月7日
記入者　小出

農協改革について

今年2015年2月8日に、政府と全国農業協同組合中央会（全中）の間で、全中がこれまで全国各地にある700に上る地域農業に対して独占的にしていた監査権を廃止する事になりました。

全中とは、昭和29年に農協法に基づいて設立された組織です。
その当時、経営に行きづまる地域農協が多くあったことから、農協の指導監督の役割を担って誕生しました。
そのため全中は、それぞれの地域の農協に対して監査権や指導権という強力な権限を有していました

広く知られているように、戦後の食糧難を出発点として、日本の農政は（全中と政府自民党との二人三脚により）米の増産を最優先の課題として進められてきました。

1995年にいわゆる食管法が廃止された後も産地のコメの集荷を一手に引き受けたのが地域農協であり、その頂点に立ちこれを指導・監督し、統制してきたのがJA全中だということができました。

一方、1970年代以降のこめの余りが深刻化する中、価格的な競争力を失った日本の農作物(特に米）が国際的に後れをとってきたというのもまた事実です。
阿部政権はこうした農協中央組織による農業生産や農作物価格の「管理」体制を日本の岩盤規制とみなし、ここにメスを入れることによってコスト削減や輸出などの販売ルートの開拓に向けた地域農協の創意工夫を促すとしています。

日本の農業の可能性を生かし、さらなる高みにステップアップさせる為、様々な環境にある農業者が地域の特性や実態に応じてそれぞれ工夫をこらし経営を自立させていくための努力が地域農協に求められています。

そうした観点から、今回の決定が地域の各農協が中央組織から自らを開放し、経営の幅を広げるきっかけとなるます。

作成日：平成27年8月5日
作成者：葛西　厚

F1種について

●F１種の始まり

・1950年頃、アメリカの化学薬品メーカーのモンサント社が、
トウモロコシの大量収穫を目的とした遺伝子操作種の開発が
始まりといわております。

サンモント社とはもともと、農薬などの開発メーカーとして有名
このトウモロコシの種をハイブリット種と呼び、世界各国へ輸出が
開始されます。

日本のサンモント社傘下のメーカー

カネコ種苗・タイキ種苗・サカタのタネ・雪印種苗・トヨハシ種苗
中原採取場・小松屋種苗・野原種苗・松永種苗など

●交配種の良い点

・形や色艶が良い
・味が食べやすくなっている
・大きさなどが均一に成長するため、出荷作業がしやすい
・成長が早く、収穫量も多い

●悪い点

・一代限りの収穫となるため、都度新しく種の購入が必要

・化学肥料の併用が必要なため、農家の出費も膨らむ

・農地が荒れて、作物の収穫が出来なくなってしまう。

日本独自の種の開発

カネコ種苗・サカタのタネなどが日本独自の種の開発に取り組み
完成したのがF1種（交配種）である。

異業種として

サッポロビール・キリンビール・サントリーなど、ビールメーカーも
F1種を使用して、麦芽の育成をしていると言われています。

●販売ルート

ホームセンターや種苗販売店など、市場に出ている9割以上が

F1種となっています。

販売されている種のパッケージに、「F1種」と明記されています。

図1参照

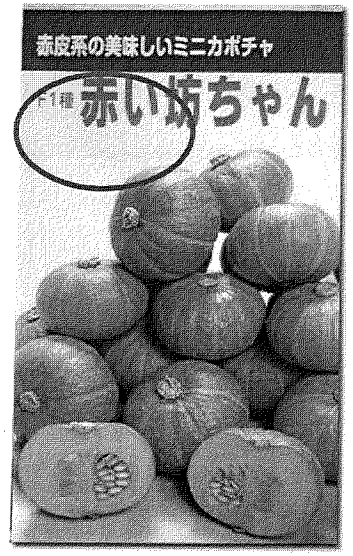


図1

●どの様に交配されているのか

一言でいえば、良いとこ取りの種

色・形は良いが
酸味の強いイチゴ

＋

色・形は悪いが
甘味が強いイチゴ

↓

色・形は良く
甘味の強いイチゴ

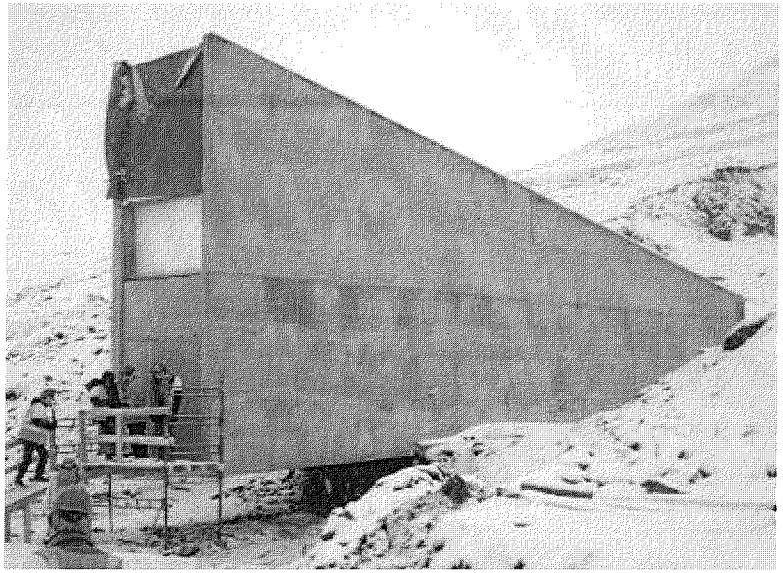
●交配種の良い点

・形や色艶が良い
・味が食べやすくなっている
・大きさなどが均一に成長するため
　出荷作業がしやすい
・成長が早く、収穫量も多い

●現代版　ノアの方舟計画

・2008年にノルウェー政府が推進した「ノアの方舟計画」が元となり資金面で協力しているのが
ビル・ゲイツとロックフェラーなど

・ノアの方舟計画とは、いづれ来るとされている世界的食糧難に備え、最大300万種の種子を
冷凍保存可能な貯蔵庫造る事



ノルウェー領スヴァールバル諸島最大の島である、スピッツベルゲン島にある
別名　スヴァールバル・グローバル・シード・ボルトとも言われています。

固定種について

作成日：平成27年8月5日
作成者：青田　善弘

昭和30年代までは、固定種の需要も多く日本全国に広く販売していましたが40年代から
F1種の時代になり、生育速度や均一性や周年性で劣る固定種は出荷用野菜の種としては
まったく売れなくなってしまいました。
固定種とは何世代にも渡り、絶えず選抜、淘汰され、遺伝的に安定した品種のことです。
ある地域の気候や風土に適応した伝統野菜や地方野菜を固定したものでF1種に比べ
生育時期や形、大きさなどがそろわないこともありますが地域の食材として根付き、個性的で
豊かな風味を持つことが特徴です。
この固定種は親から子・子から孫へと代々同じ形質が受け継がれている種で味や形などの形状が
固定されたものが育ちます。
固定種は自然淘汰のみで生まれた種と、人間が抜粋を行いながら生まれた種が存在しますが、
F1種が主流の今はあまり使用されなくなりました。
固定種のメリットはF1種に比べ、発芽の揃いや生育の揃いは悪いがそれ故に収穫期がずれる
ため長期に渡って収穫が楽しめます。
また　味にそれぞれ特徴やクセがあるものが多く、野菜本来の独自の味わいが楽しめます。
代表するものでは、丹波では黒豆や小豆がありますが同じ大納言小豆でも丹波産と北海道産
とは形や大きさ、味や品質もまるで違います。
ほかにも、だだちゃ豆や仙台なが茄子、練馬大根や亀戸大根、三浦大根なども有名です。
昔の農家では野菜を収穫した後に来年用の種を自家採取していましたが生産調整、価格の統一、
何かと便利な今の時代、F1種が普及するにつれ、わざわざ種を採取しなくなり、種苗会社
の種を購入するようになりました。
本来農作物とは天候や天災など自然の恵みを受けながら豊作の年、凶作の年により収穫が
決まります。
安定した供給をするため種苗会社は特定の病気や農薬に強い野菜の種を開発してゆけば、
儲かる。
まさに
「種を制する者は世界を制す」
私たちは見栄えが良く、大量にスーパーに並ぶ遺伝子操作された種からできた野菜を買い
毎日口にしているのです。

固定種を調べてゆくかなで
これが本当のきゅうりの味、本当のトマトの味、、、など固定種からできた高級な野菜を求め、
いつの間にか本当の味をわざわざ探さなくてはならない時代なのだと感じました。